

ブッダはなぜ出家したのか

織 田 顕 祐

歓迎のことば

みなさんこんにちは。今日は仏教学会の新入会員歓迎会ということで、毎年大谷大学の仏教学科に入ってくださった方々にその年の学会の責任者が歓迎講演するのを恒例行事としていますので今日はその講演会を実施します。

改めて紹介させていただきますが、私は織田顕祐と言います。仏教学科のロバート先生と同じくらいの年代です。今年で六十一歳なので皆さんのお父さんやお母さんよりもちよつと上の世代だと思います。私には三人娘がいるのですが、一番下の娘が君たちよりも年齢が一つ上です。私が娘の保護者会に行くと随分と年寄りの親でした。たぶん、みなさんのお父さんやお母さんは僕よりも十歳くらい若いと思いますから、おじいさんというわけではないけれども、おじいさんからお父さんの中間くらいの人間だということです。

今日は歓迎講演というわけで、せっかく皆さんが仏教学科に入ってくださったのでお話しますが、僕も昔大谷大学に通っていたんです。僕はこんな顔をして六十歳を過ぎましたけれども、皆さんも今から四十年経ったらこんな顔になりますから楽しみにしてください。楽しみににはできないですか？必ず四十年も経ったらこんな顔になるので心

配しないでください。

僕は昔学生として大谷大学に通っていた時にいろいろな経験をしてきましたが、いつの間にか皆さんに話をする側になっていました。そんなことを改めて「不思議だな」と思います。皆さんと同じような十八歳の時にどんなことがあったのか。それからどんなことに会って仏教学を学び今に至ったのか。また皆さんにこれからどんなことをしてもらいたいのか。何かのヒントになればと思つて今日は話したいと思います。

題をつけるように言われましたので、「ブツダはなぜ出家したのか」という題をつけました。これから皆さんは仏教学を学んでいくのですが、ブツダという人は、今の感覚でいうとものすごい大金持ちで、ものすごい権力者とか、地位も身分も保証された環境に生まれたわけです。釈迦族という一つの国の皇太子として、父親が亡くなれば自分が王様になるという立場だったわけです。そんな立場の人がなぜ出家したのでしょうか。出家というのは家から出て一人になって道を求めて生きていくことです。そんな身分の人がそれを辞めてなぜそんなことをしたのか。これが僕には非常に疑問でした。望んでもほとんど手に入らないような立場に生まれたはずなのに、何故それを辞めてしまったのか。本当に疑問で大谷大学に入つて学べば学ほど不思議に思いました。そんなことがありましたので今日はそのブツダという人は一体何を考えたのか、どういう人だったのかということを皆さんと一緒に、また僕の経験を振り返りながら考えてみたいと思つて「ブツダはなぜ出家したのか」という題にさせてもらつたわけです。

改めて歓迎の辞というわけではありませんが、たくさん大学があつて、多くの学部がある中でこの大谷大学の仏教学科を選んでくださったことに感謝します。僕は皆さんに会えてとても嬉しいし、責任を感じます。四年の間に皆さんがどんなことに会つてもらえるか。それに対して僕たちは責任があるな、とそんなことを思います。ですから、毎年新入生の人たちが集まるたびに気が引き締まるというか、襟を正すといいますが、そういう思いがあるのです。

今は選ばうと思えばいろんな学部が選べるわけで、そのなかで仏教学科を選んでくださった。一人一人にそれぞれ

の動機があると思います。僕自身はあまり積極的な動機があつたわけではなく、むしろネガティブな、ちよつと覗いてみようといった思ひ上がった態度で、愛知の田舎から大谷大学に出てきたのです。今、思ひ出すと恥ずかしい限りです。動機はそれぞれ違っているかもしれませんが、何に出会つて、どのように自分が変わつて成長していくか、そのことの方がずっと大事ですから、仏教学科に入学されたことをまずは大事にしてほしいと思います。人数も二十人くらいですから、僕たちもよく皆さんのことに目が届きます。どんなことでも困つたことや、質問があれば相談してください。私の研究室はロバート先生の向かい側ですから、ロバート先生のいない時には織田のところに来てくださつてもいいし、全くオープンです。いつでも来てください。困っていることは自分一人で抱えてしまつたら解決できません。友達に相談するとか、先生に相談するとか、一緒に考えるということが大切だと思います。悩みを抱えて誰かに相談したら恥ずかしいなどと思つて一人で抱えてますます問題が大きくなつてしまわないように、困つたらすぐ相談するというのが大事です。遠慮しないで是非相談してもらいたいと思います。これはお互いのためにそうしましょう。

入学して最初にビックリしたこと

僕は先ほどお話ししたように皆さんと同じように十八歳の時に愛知県の片田舎から京都に出てきました。今から四十年以上前です。今六十一歳ですから、四十二、三年前の話ですね。学生番号がみんなは一六で始まっていますが、僕は七三でしたから一九七三年です。ですから、そこから四十年以上経つてこんな白髪頭になつたわけです。それまでは愛知県の豊田市というところに住んでいました。トヨタ自動車の本社のあることで有名な町です。そこで高校生まで育ててもらつて、それから大谷大学に来たのです。一人で出てきたものですから最初は心細くて、大学の寮に入つて寮で友達ができてようやく落ち着きました。僕は四十三年前に皆さんのように仏教学科の学生として大谷大学に

入ったのです。四十三年経って見たらこんな顔になって、逆に皆さんに向かってこうやって話す立場になったのですが、やっていることはそれほど変わらないという感じが今でもするのです。かつては授業料を払っていたのだけれど、今は給料を頂いている。普段やっていることはそれほど変わらないのだけれど、「何かどこおかしいのではないか」といつも疑問に思って、「本当にこれでいいのかな」という申し訳なさみたいなものがいつも自分にあります。やっていることは經典を読んで考えていることぐらいだから本当にそれほど変わらないのです。

なぜこんなことになったかと振り返ってみると、私が大学に入って非常にびつくりしたことがありましたので、そこから始めたいと思います。それまでは愛知県の田舎のごく普通の高校生でした。人が生きていくにはやはりきちんと勉強して、いい会社に入ればいい就職をしなければダメだと本気で考えていました。そのころ日本は高度経済成長期で、ずうっと成長していくと思われていた時代でしたから、その流れに乗って、自分もそういう就職をして、結婚して子供が生まれたら幸せな家庭になるだろうな、いつも思っていました。普通、誰でもそう思いますよね。僕もそういう思いでいたのですが、高校二年生の時に頭を叩かれるような、自分の考えを振り返らないといけないことがいろいろありました。今思えば青年期特有の込み上げるような不安定感だったと思います。なんととも言えない落ち着きのない時期だったのです。十七歳の頃のことです。それでいろんな人に出会ったり話を聞いたり相談してみると、ある時大谷大学という名前を知ったのです。父親は大谷大学の出身ではないのですが、相談してみると「是非行きなさい」と言われました。一度見学してこいと言われて、お金をもらって一人で見学に来たのです。今のようオープンキャンパスなどという行事はない時でした。それで京都駅から市電に乗って、烏丸車庫でおりて大学の周りをぐるっと一回りしてみたのです。「落ち着きたい大学だな」と感じたことを今でもはっきり覚えています。それで入学試験を受けて合格したので大谷大学に入学したのです。

当時、今の一号館のあたりに洗心学寮という大学の学生寮がありました。そこに三十四人が新入生として一緒に入

って、六畳間に二人ずつ住んでいました。今のような個室ではなくて、畳が六枚くらいの部屋に二人ずつ入るので、相部屋なんです。だから、朝起きる時はルームメイトも一緒に起きるし、学校へ行く時は違うけど、帰ってきたらまた一緒です。仲が良かったらいいけれど気が合わなかったら鬱陶しいですよ。そういうところで学生生活が始まりました。僕の相手は石川県出身の平崎君という男でした。彼も仏教学科でした。だから寮では相部屋、学校の授業でもほとんど一緒。帰っても一緒に、僕も少し変わり者だったでしょうが、平崎君も随分個性的な男で、「変な奴だなあ」とずっと思っていました。

当時は一回生と言っていましたが、今でいうと人間学Ⅰのような授業、その頃は「総合」と言っていましたが、平崎君と一緒に受けていたのです。そこでびつくりするような一人の先生に出会ってしまったのです。何にそんなにビツクリしたのかと言うと、入学して二、三週目の時に一つの話を読んだのです。どういう話かというと「一人の男がいるでしょう。その男は、床の間の柱に背を向けている。…床の間は花を生けたり掛け軸を掛けたりするところです。そこに床柱というのがあって、その柱を背中に坐っている」というわけです。それはどういうことかという、一畳上座に坐っているということです。要するにそのグループの中で一番偉いところに坐っているということです。さらに「その両脇に女性がいる」、つまり彼女というかパートナーがいるわけです。「懷にはがっぱりお金があつて、目の前にはお酒とご馳走がある。こういう男が一人いたとする」と。そんな一番上座に坐ってお金をがっぱり持つていて、彼女もいて、ご馳走とお酒があつたらもう十分だと思えますよね？でも、その先生が言うには「その男には決定的に足りないものが一つあるんだが、君たちわかるか？」とおっしゃったのです。ちょうど今の君たちと同じような感じ。僕が君たちと同じ歳の時、その先生は今の僕よりも少し若かったと思います。みんなどう思いますか？ちよつと想像してみてください。どんなことを思いますか？何か足りないものがありますか？ただ足りないんじゃないですよ、決定的に足りないんです。その時の先生の顔を僕は今でもはっきりと覚えています。そして先生が「では一

週間考えてきてください」とおっしゃったんですね。

それで、平崎君も同じ授業を受けていたので、僕は彼と一週間二人で議論しました。僕は田舎出身の純朴な人間でした。一人で京都に出てきて大学に入って多少緊張していたのかもしれませんが、真面目というか、素直というか、とにかく先生が言われたことをまともに受け取ったわけです。平崎君も僕と同じよう田舎出身の人間だったから純粹でシヨックで、先生の言われたことを真面目に聞いて二人ですつと一週間考え続けたのですけれど、結局わからなかったのです。そして、一週間後に先生が「わかりましたか？」と順番にみんなに聞いていったのです。僕は結局わからなかったから、「わかりません」と答えたのですが、要するにみんなわからなかったのです。それで先生が「誰もわかりませんか？」と言われて、次に先生は「それは○○ですよ」と言われたのです。「どの家庭にもある普通なものだよ」と言われたのでした。それを聞いて僕は余計にわからなくなつたのです。その時先生は「それは座布団ですよ」と言われたのです。僕は「座布団ですよ」というのを聞いて、笑つてしまつてさらにわからなくなつたのです。座布団なんてお金を出したら買えるじゃないかと思つたのです。でもそういうことではなかったのです。僕はその時の話がずつと頭にこびりついて離れないのです。まさか座布団とは思わなかったですし、座布団つて一体なんだろうと今でも考えるわけです。

四門出遊の物語

そういうことがブッダの出家に関係があるのか無いのかをいっぺん考えてみようと思います。皆さんはこれから仏教学科でブッダのことを学んでいくことになるのですが、ブッダがなぜ出家したのかを考えるととても大事な一つの物語があつて、それはブッダの伝記を記した經典の中に書かれているのです。ブッダは先ほど話したようにカピラ城の王様の家に生まれたわけです。それで、カピラ城の王様の生活ぶりというのは演習Ⅰで学ぶと思いますが、ブ

ツダのためにだけに三つのお城があったり、池がたくさんあったり、蓮の花が咲いていたり、いつも音楽が奏でられていたり、常に大きな扇子で扇いでもらったり、日傘をさしてもらったりと、普通では考えられないようなリッチな生活をしていたわけです。誰も着ていないような服を着て、家来に至るまでご馳走を食べていたと、ブツダが弟子に説いた経典に書かれています。よほど恵まれた生活をしていました。これは先ほど話したような床柱を背中に背負ってお金がつつぱりあって、ご馳走があつて彼女がいるという一人の男の程度をもっともつと上げたものを想像すればいいと思います。

そういう生活をしていたブツダがなぜ出家したのかというと、そこには必ず一つの物語が付いているのです。それが「四門出遊」です。ある時ブツダは四つの門から遊びに行こうと思ったのです。カピラ城は日本のお城と違ってインドのお城なので周りは塀で囲まれています。それで、簡単には外に出られません。また王子ですから、城の中に何でも揃っていたでしょうから外に出る必要もないわけです。それがある時、気晴らしのために門から出て外に遊びに行こうと思ったわけです。ブツダは王子様だから、きっと大事に育てられたに違いありません。それで「気晴らししたいな」ということで遊びに行こうと思ったのです。すると、四つの門の外でびっくりすることに会ったのです。それが四門出遊という物語です。それをみなさんに紹介したいと思います。

私のお話だけは退屈でしょうから、ボロブドゥールの壁の写真とか、彫刻を見てもらおうと思います。ボロブドゥールとは、インドネシアにある仏教遺跡です。こんな格好をしています。インターネットから借りてきた写真があまりきれいではありませんが、石の大きなピラミッドのようなものです。一番下は四角で、一辺が百メートル以上あると思います。大谷大学の東側のキャンパスより大きいくらいかな。石垣のように結構大きな石がずうっと組んであって、ぐるぐると回りながら順番に下から歩けるようになっていっているのです。入り口から入って歩いて行くと幅二メートルくらいの通路になっていて、両側に石に彫りつけられた物語が続いているのです。それを見ながら歩いて行くと、

物語を通してだんだんと仏教の教えに出遇えるような構造の遺跡です。そこに何が彫つてあるかというと、一番下は「善悪因果」といって、悪いことをしたらこういう目に遭いますよ、こういうことをしたらこういうことが起こりますよと教えるのです。自分の生活を慎むことが物語によって説かれているのです。お酒ばかり飲んでいたら体を壊しますよ、といった具合に自分の生き方を考えるような善悪因果の物語が彫つてあるのです。一階上がると次はブツダの生涯が描かれているのです。ブツダの伝記に基づいて、何百枚という絵が彫つてあるのです。その中に「四門出遊」の物語があります。

その四門出遊の最初はこんな感じですよ。カピラ城の東の門での出来事を表したレリーフです。ここに車に乗つて外へ出かけようとしているブツダがいますね。日傘をさしてもらいながら出かけて、家臣がブツダに付き従っているという場面です。真ん中がブツダです。一番左にちよつと弱々しい感じの人がいるでしょ？腰が曲がつてとぼとぼ歩いている人です。この人を見てブツダは何と言ったか。ブツダは「あれは何ですか？」と聞いたのです。そして、お付きの人は「老人ですよ」と答えました。それでブツダは「老人って何ですか？」とまた聞いたのです。なんでこんな質問をしたのでしょうか？みなさんはどう思いますか？「老人って何ですか？」と聞いたなら、「老人は年をとったら、みんな腰が曲がつて頭が白くなつて力がなくなっていくのだ」と答えたのです。そうしたらブツダはさらに質問したのです。なんと「それはこの人だけのことなのか」と聞いたのです。そしてお付きの人は「身分があるとお金を持つていようと若かろうとどんな人でも老人になりますよ」と答えました。ブツダはそれを聞いて、びっくりしてものすごく嫌な気持ちになつて城に帰つたのだそうです。

このようにブツダは三回質問したのです。最初に「あれは何ですか？」と聞いたなら「あれは老人ですよ」と。次に「老人って何ですか？」って聞いたならこういうことですよと説明を受けた。さらに「それはこの人だけのことか」と聞いたなら「誰でもなりますよ」と言われて嫌な気持ちになつて帰つてしまつたのだそうです。

王様は王子がすぐ帰ってきてしまったので、一体どうしたのかと聞いたところ、こんなことがありましたと報告を受けます。その後ブツダは嫌な気持ちで暫く城にいたのだそうです。

少し過ぎて、次は同じように南の門から外へ行くこととするのです。南の門でも同じようにブツダが出て行く場面のレリーフの写真をみると左側のところにガリガリにやせ細った人がいるでしょ？これは病人です。また同じように聞くのです。「あれは何だ」って。すると「病人ですよ」と。また「病人とは何か」、これこれですよ、と。そしてまた「この人だけのことか」と聞いたのです。それで「それは違いますよ」と。「お金があるうが身分があるうが老若男女関係なくみんな病人になりますよ」と言われました。それを聞くとまた急に憂鬱な気持ちになったのです。それでまた城に帰ってきてしまいました。東門と同じことですね。

もうわかりますね。次は西の門から行くのです。東、南、西と順番に行くわけです。ここに寝転んでいる人がいますね。見えますか？ここに車に乗っているブツダがいて、お付きの人がいて、ここに寝転がっている人がいます。この人はどういう人かという、亡くなった人を表しているわけです。それでまた同じように、ブツダが質問するので。そして答えを聞いて嫌な気持ちになって城に帰ってくる。東で老人に会って、南で病人に会って、西で死人に出会い、最後はもう北しかありません。王様は王子が外に出ようとしてみてもすぐ帰ってくるから、王子が嫌なものに出会わないようにお触れを出して、不都合なものは全部排除しなさいと命令するのです。

そして北の門から出ると、ここに立っている人がいるでしょ？今までの老病死とは違う人が描かれていますね。これは出家の沙門と言います。出家して生きる道を求めている修行者にブツダは出会ったのです。それで王子は「あなたは何をしているのですか」と聞くのです。すると「一切の世俗を離れて、生きる道を求めています」と。いろいろな会話をします。そうすると王子は今度は嬉しい気持ちになって城に帰ってくるのです。それで嬉しい気持ちにはなっただけでもまた急にいろいろと考えるわけです。なぜかと言うと、自分は王子なので修行者のよう

に出家するにはどうしたら良いのかと考えて悩むわけです。国の王子という身分もあるし、父や母に対する恩義、妻への愛情、そうした中でどうすれば出家できるか苦悩したと經典には書かれています。その後ブッダは出家のきっかけを得て、カピラ城を出て、一人の修行者となって修行してブッダになるのです。

これが「四門出遊」という物語です。そこにはブッダが王子の身分をやめて出家していく動機というか理由という背景が描かれていると思うのです。經典の中にはこれが動機ですよといったことは何も説かれていません。しかし、經典はこれを通して考えてみようと言っているのではないのでしょうか。みなさんなぜだと思いますか？何故ブッダは出家した人のだろうか。普通は望んでそこに入って行きたいような世界なのに、そこから出てきてしまったということでしょう？それは一体なぜだろうということですね。みなさんがこれから学んでいく仏教学を開いたおおもとのブッダという人はこんな人なのです。だから少なくともブッダは、神様仏様みたいな感じで自分の欲望を叶えてくださいとか、救って下さいとお願いする対象ではないのです。

以上が、今日みなさんに言いたかったことです。それで「ブッダはなぜ出家したのか」という講題をつけました。これだけ言ったら今日の講演会は終わりでいいのです。僕が大谷大学で最初に出会ってびっくりした話、それとブッダの四門出遊という物語で説かれていること、これを参考にして後はみなさん一人一人が自分の頭で考えればいいのです。

清沢満之の言葉から

最後にもう一つ、せっかく大谷大学に入ってきたので大谷大学のことを話したいと思います。入学式の時に清沢満之先生のことを聞いたでしょう？みなさん入学式の時のことを思い出してみてください。講堂の正面にお花が供えてあつて灯明が燃えていましたね。覚えていますか？その右側と左側に絵が三枚かかっていましたが気づきまし

たか？今度一度ゆっくり見に行きましようかね。なぜ、あそこに灯明が燃えていたかというところ、あそこには仏さまがいるのです。ブツダがいるのですよ。ただし、大谷大学のブツダはみなさんが知っているようなブツダの形をしていないのです。字で書かれてあるんですね。「帰命尽十方無碍光如来」という文字が大谷大学のブツダなのです。それで、花と灯明が供えられていたのです。それで最初に勤行をしたのですよ。

肖像画の話に戻ります。向かって左手に一枚、向かって右手に二枚かかっていました。左手の一枚の絵は、暗い感じのあまり友達になりたくないような男の人の絵がかかっていたのですが、それが清沢満之という人です。その清沢満之という人は近代の歴史中で非常に大事な人です。大谷大学の初代の学長を務めた人です。

それだけではなくて、あまり世間では知られていないかもしれないけれど、私は、この人がいなければ近代日本の宗教界は大変なことになっていたのではないかと思います。世の中はそうしたことにより関心がないかもしれないかもしれません。その清沢満之先生は、「吾人一般の修養の主眼（中略）パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に、宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出ずる至盛の要求のために宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むる所なし。それかくの如きが故に、修養は自覚自得を本とす。他人のこれを代覚代得すべきにあらず。（榮養もまたしかり。）」という言葉を残しているのです。これは「御進講覚書」というメモのようなものの中の文章なのですが、岩波書店の『清沢満之全集』の第七巻の一八八ページにこの言葉があります。大体どんなことを言っているかわかるでしょう。これは百年以上前に「宗教」という言葉がまだ日本に定着していない頃、清沢満之がそれを定義してこんなことを言っているのです。それから百年経って、今では「宗教」という言葉にいろんな意味がついているけれど、日本で最初に「宗教」という言葉が使われたときにはこんな風に言っていたのです。

「吾人一般の修養の主眼」の「吾人」とは私たちのことです。私たちが身を慎んで自分を修養する、一生懸命学んでいく目的は何かということです。それで「〇〇のため」とたくさん書いてあるでしょう？でもそれとは違うのだ

と言うのです。太字になっている「人心の至奥より出ずる至盛の要求のために宗教あるなり」の「人心の至奥より出ずる至盛の要求」という言葉ですけれど、人の心の一番深いところから出てくる一番強い要求のために宗教があるのだと、こういう意味の文章ですね。そういうことを自分自身が知るために「修養」して、身を慎んで自分のことを考えなさいと言っているのです。「修養」は「修行」とは違います。自分の思う通りに好き勝手なことばかりやっていてはダメですよということを、ここでは「修養」と言っているのです。

それは何のためかというと、「パン」ですから、美味しいご飯を食べること。仕事で出世するとか、人道とか富国強兵といういろいろ書いてありますけれど、そういうもののためではないと言っているのです。僕たちの心の一番深いところから出てくる一番強い欲求のために宗教というものがある、というわけです。これは清沢満之が考えた言葉です。今、みなさんがこれを読んでもそれほどわからないことはないでしょう。百年以上前の言葉だけれど、おおよその意味は伝わっていると思います。それで「人心の至奥より出ずる至盛の要求」とは一体何か。百年前の清沢満之はこのように表現しました。みなさんの心の中にある一番深い要求、自分でも気がつかないような言葉にもならないような一番強い要求、そういうものが確かにありますね？ブッダにもあったわけです。彼は老病死を見て、身分だとかお金だとかそういうことではない自分自身の内面というか自分の中から出てくる、びつくりするような、何とも言えないような心の働きとか、要求に気がついたんだと思うのです。僕が出会ったのは「座布団」という言葉だったのですが、上座に坐ってもパートナーがいても、食べ物があってもお金があっても解決しない課題、言葉にできないようなびつくりしたこと。僕は、座布団という言葉聞いて、座布団なんかお金を出せば買えるじゃないかと正直思ったのです。ブッダのびつくりしたことは、「四門出遊」で触れたとおりです。身分とか地位ではどうにもならない自分自身の内面的な欲求、清沢満之のいう「至盛の要求」というものにきつと気がついたんですね。ブッダの時代は出家して修行するのは道を求める人の常識でしたから、その常識に従って道を求めていったのです。現代の僕たちがブッ

ダと同じことをする必要はないと思いますけれど、清沢満之が言うような「至盛の要求」は、食べ物を食べている間は気づかないけれど食べ終わったら気がついてしまうような僕たちの心の奥から出てくる深い内面の声のことです。遊んでいる間は忘れていても遊び終わって一人になると自分の中から湧いてきて常に消えないような心の声がありますね。「人心の至奥より出ずる至盛の要求」という清沢満之の言葉は難しい言葉です。僕がびっくりしたこと、ブツダが「四門出遊」を通して体験した、王子の身分を捨ててまで求めざるを得なかったこと。そして清沢満之のいう「至盛の要求」、こうした言葉はどこかで繋がっているのではないかと思うのです。みなさんはどう思いますか？

そして、清沢満之は最後にこんなことも言っています。「それかくの如きが故に、修養は自覚自得を本とす」、つまり自分のことは自分でやらなければならないということです。「自覚自得」は、自分で気がついて、自分で見つけていくしかないということ。だから「他人のこれを代覚代得すべきにあらず」は、忙しいからといって人にやってもらうわけにはいきませんよ、ということですね。「栄養もまたしかり。」と書かれているでしょう。「栄養」はご飯のことです。ご飯と同じだと言うのです。自分で噛んで自分で消化して初めて自分の力になるのですね。だから自分でやらなければならないのです。今日はちょっと忙しいからお母さんに代わりに食べてもらうとか、父親や兄弟や友達に食べてもらおうということではできません。それと同じだと言うのです。「人心の至奥より出ずる至盛の要求」、これは百年前の言葉だから少し堅苦しいけれど、自分の心の奥底からふつつつと湧いているのだと思うのです。普段少しくらい考えても解決しないし、忘れていたほうが楽だからと思って蓋をしていることがある。その蓋を取ったのがブツダなのです。それを清沢満之は、自分というものが大事なのですよ、自覚自得を根本とするのだと言い直しました。ブツダはそのために、王子の身分を捨てて自分の要求を確かめていったのだと思うのです。僕たちは現代人だからブツダのように出家する必要はないと思います。そして自分の内面的な要求は一人一人違う言葉になると思いますが、どんな人にもそういうものが必ずある。これは人間だったら必ずあると思うのです。それに自分で気がついていく。

私たちは、言葉を知らないと物事が整理できません。こんな百年前の言葉だから面倒臭いですが、「人心の至奥より出ずる至盛の要求」という言葉を聞くと、自分の中にもそんなことがあるなあと見えてくるでしょう。そういう風に、深い言葉を知ると自分の深い心が整理できる。ブッダのことを知ったらそれを通して自分の中の言葉にならないようなものが整理できるかもしれない。何のために学ぶかといえば、自分のために、自分が一番大切だから、そのために学ぶのです。

これから、みなさんが学んでいくことは以上のことだと思えます。仏教学は仏教を学ぶのではなく、「自覚自得」で自分のことを自分で知っていくことに他なりません。自分を深く理解する人は、他人も深く理解できるようになるでしょう。このようにして共に人間の中にある課題に気づいていく。そして、一人の人間としてガッチリとした人間になることを学んでほしいと思うわけです。

私の言いたいことが十分に伝わったかどうか分かりませんが以上で終わりにしたいと思います。